

飛翔な日々

取材、写真撮影、記事執筆などの活動で飛翔を製作している編集委員。客観性を重んじる取材記事からは読み取れませんが、実はとても個性的な面々です。そこで今回は、個々人の考えを発表する場を設けるとしました。題して『飛翔な日々』、編集委員有志によるエッセー集です。編集委員として、学生として、ひとりの人間として、普段どのようなことを考えているのでしょうか。

西

条の土地は広い。見える景色は緑が多い。広大な校内も広い。見える景色は若者が多い。

広大が、ではなく、大学という場所がすごいと私が思うのは、何かが出来ると自分自身を信じられる人が集まっているからだ。

とてもまぶしい。そして楽しい！

時々くたびれたりもするけど、そういうときは休みたいだけ休んで、また気が向いたらがんばろうと思います。

(川村真弓)

ど

うにも自分には物事を先延ばしにする癖がある。したくないことは後回し、というのには勿論そうだが、好きなことですら後回しにすることがしばしばあると最近気がついた。

やらねばならぬが面倒なことというものは後に回す。一度か二度は「早めに済ませよ



DAYS OF HISYOU

う」と心に誓うが、結局は期限ぎりぎりに片付ける。

一方好きなことはというと「今やるのは勿体無い」「もつとふさわしい時間があるはず」などの理由から手を出さないことがある。最適の時間を求めるがゆえに見送るのである。気に入りの作家の最新刊、好きな漫画の最終巻、映画館に観にいけなかった映画のビデオ、エトセトラ。

では自分が普段主に何をしているのかと言えば、要するに「気軽にできる好きなこと」もしくは「どうでもいいこと」である。前者はともかく、後者の時間を削れば、もう少し時間を有効に使えるのではないのか、自分。そのようなことを考えながら今も、明日がメ切的この文章を書いていく。
(小野未千恵)

梅

の花が散り、桜が咲き始めた頃だった。ある友人が、こんなことを言った。

桜の花はおとなしいけど、梅はどうにも派手に見える。

これはわたしの考えと違ったので、こう答えた。
わたしからすると、梅の方がおとなしくて、むしろ桜に豪華なかんじを受ける。

同じものを見るにしても、色々な見方、見え方があるらしい。しかし、それでは、どちらかの考えをして正しいと間違っているとか、果たして言えるだろうか。

友人の見た梅や桜を、わたしが見ることは、おそらく出来ない。だからこそ、わたしの見ている世界も、友人の見ている世界も、大切にしたいと思う。
(五十嵐太郎)

先

日、何を思ったか……突然カレーが食べたくなりました。ところが僕はカレーのあの辛さを好かないので、何かの勘違い……ということ(似ている)ハヤシライスだろう、と。

断っておきますが、ハヤシライスはカレーの紛い物だなんていう考えではないですよ、はい。ともかく、その日の晩御飯はハヤシライスに決定しました。それから調理B

OKを開きますと、どうもデミグラスソースが必要でした。しかし当然持っているわけもなく……よし、作ろう、と。自炊生活一年生な僕はナゾの決意をしたのでした。

話は打って変わりますが、僕は小さい頃エンジンが好きでした。伝記は何回も読みました。次々と何かを発明する様は小さい僕をワクワクさせました。

発明王の異名を持つエンジンの業績の中に電球の実用化があります。その電球を普及させるためにはまず、安定した電力の供給が必要でした。そのためにエンジンは水力発電所を造ります。そのためには強化コンクリートを、そして工事現場で働く人が住む家を確保するためにガムテープ

やベニア板を開発していった、という話が僕のお気に入り。

結局。デミグラスソースを作るには、コンソメが必要だったのです。ないよー。しかし、なぜか決意が固い僕は、……よし、作ろう、と。

何考えてたんでしょね？
何も考えてなかったんでしょね。

突然、牛肉と鳥肉を鍋に放り込みました。コクを考え始めた僕は、トマトピューレの煮立つ鍋に二種のソースを突撃させました。さてさて、何？
ワインがほしい？ ……みりんがいいや。

そんな調子で突き進み……出来上がったのは、三時間後でした。それでもできたのは、紛れもなくデミグラスソースで、ご飯にかければハヤシライス completion でした。買ったほうが安かったのは内緒です。
エンジンの話と、デミグラスソースを作った話では、桁違いのスケール差があります。



DAYS OF HISYOU

す。……そのことは重々承知。

しかしです！ デミグラスソースを作っているときの僕は、確かに小さい頃憧れた発明王気取りでした。目の前に聳え立つ難題を次々と解決していき、目的に突き進む。その材料が、行く先々の道端に転がっているような気がしたのです。

そんな気分になれたのは、単に僕が未熟だからなのかもしれない。

しかし、何に関してもまだまだ未熟な僕です。ならば、またそんな楽しい体験ができる日が来るのかもしれない。新しいことに挑戦し続けることができれば。

(中村洋平)

た

まにエンドレスで起き続ける夢を見る。目覚ましが鳴る、ベッドから起き上がる、いつもの朝が始まる。のだが、ある地点で何らかの違和感を覚え「あ、夢だこ

れ」と気づく。起きたと思ったら夢、また夢。ひどいときはそんな「夢中で超リアル起床」を何度も繰り返す。当然かなり疲れる。朝から夢と一戦交えるわけだから、やっとな「本当に」起き上がった時には寢覚め最悪心身ズタボロさながら落ち武者。

一度ならまだしも何度もこういった夢を経験すると、さすがに悠長に落ち武者ぶつてもいられない。これ以上夢なんぞに私のフレッシュな朝を阻まれてはならぬ、ということで『あなたの深層心理が解き明かされる』とのつけから大風呂敷を広げさまざまな夢診断の本を立ち読んでみた。

表紙のコピーからして極めて胡散臭いが、書いてある内容も期待を全く裏切らない胡散臭さ。それはまあいいとして私の問題の夢に該当するものは一つも出てこない。面白くもなければ有益でもないという、つくづく無能な本である。著者および編集者の怠慢

を心の中でやや大仰に嘆いている内に何だか全てのことがどうでもよくなり、まあフロイトあたりなら「ハア？ 性的欲求不満じゃね？」で一蹴されるよね、と自分を納得させ書店を後にした。

私の大幅に誤っているであろうフロイト観はさておき、こういうタマネギの皮のような夢を見ると、何が夢か何が現実かだなんて、非常に曖昧なものに思えてくる。私が見ている現実世界も、私がそう思っているというだけで、実は夢、という可能性もきつぱりは否定できない。逆に、私が眠るとき見る夢が、実は現実であるという可能性も。起きたつもりで夢を見ているのかもかもしれないし、眠ったつもりで現実を見ているのかもしれない。

夢と現実とは、相反するものではなく一幅の絵のようなものなのだろうか。そんなことを考えつつも別にさらなる考察に挑むでもなく、とりあ

えず惰眠を食う日々を送っている。
(見世梨沙)

「好

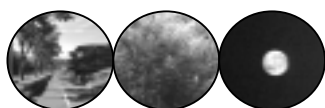
きだから、好き！」なんて、バカらしいと思うかもしれない。

でも、「なんで好きなの？」と問われたら、すごく好きなモノに限ってシンプルな言葉しか出てこない。

それは、どんなに飾った言葉よりも、その人の正直な想い。組み立てられたモノは所詮ツクラレタモノだから。

「好きだから、好き！」
理由になつてないかもしれないけれど、好きってことは、それ以上でもそれ以下でもないから。

だから私はアナタのことが「好きだから、好き！」
なんてね。
(伊東遥)



DAYS OF HISYOU